

美沙はソファに腰を下ろし、じつと聞き入った。

あなたの過去など

知りたくないの

すんでしまったことは

仕方ないじゃないの

そうなのだ。仕方ないことはいっぱいある。

ふっきれたはずの想いが再び胸によみがえって

きたが、仕方ないかと、その気持ちを呑み込んだ。

何もなかったように、次の日は朝から一日中、

庭の草ぬきに精を出した。黙々と丁寧に抜いてい

った。

義父母がいた頃は庭がきれいだった。草など生え

てなかった。いつも掃き清められていた。梅ノ木

や銀杏、そしてハナミズキなどの樹木も義父は

丁寧に手入れをし、義母は寄り添うように手助け

をしていた。

薄赤い色と白、四枚の花弁のかれんな花を咲かし、

真っ直ぐに空に向かって伸びているハナミズキを

見ると、義父母や二人の子供たちと過ごした、何

でもない幸せな時期を思い出す。

子供たちが巣立ち、十年前、義母が先立ったあと

も、義父は亡くなるまで、家のことはいろいろ気

遣い、できる手仕事はよく働いてくれた。

美沙も仕事を辞めれば、家のことはきちんとした

いと思っはいたが、親のいなくなった今、気楽

さに甘えて何事も怠けていたように思う。不精な

のは夫だけではなさそうだ。

*

朝の二、三時間だけなのに、美沙が手を入れた庭

は、昨日までとは目に見えて変わった。風までが

清らかに抜けていくようで心地よい。美沙は大き

く深呼吸した。空がどこまでも青かった。

昼からはたつぷりの時間があつたが、病院へは

行かずに部屋の片付けをした。気分転換のつもり

で少しだけの模様替えを試みる。

案の定、夜になると夫から電話がかかった。

「昨日の昼からの回診で、調子がいいらしいから、

どうも来週末くらいになると退院できそうだ」

夫の声は弾んでいる。しかし美沙は、

「そうですか」

何とも気のない返事だ。それでも夫は美沙の

口調を見抜くわけでもなく、

「退院しても、リハビリに通うようだったら

入院の方がいいか」

自分流にしやべっている。

「そうですね」

美沙だって自分流だ。

「まあ、先生と相談してからだけだな」

男がそうなのか、夫の信行だけかはわからない

いが、相手の返事など期待してないのだ。

夫は、美沙の今の気持ちなど考え及ぶことも

なく、

「明日、ランニングシャツを持って来てくれるか」
退院がかかっているだけにいつもより口調
だけは滑らかだ。

行かなければならない用事を作って、自分の
話が終わると当たり前のように、電話をきった。

美沙は、夫が早く退院したら困ることもある。

未だあの写真のことで気持ちの整理ができてい
ない。それに、あの人にも逢えなくなってしまう。

もう一度あの老女に逢いたい。六十歳を前にし

て昔の恋人に逢いたいのならまだしも、一昨日

知りあったばかりの老女になんて、そんなロジッ

クがあるだろうか。

(どうしたのだろう)

様子がどこことなく亡くなった母に似ていた。それ
だけではない。興味をそえられる、そこはかとな
い魅かれるものがあつた。

(どんな人だろう)

いくばくかのことがわかったけれど、結局何も

わかってないのと同じだ。連れの男が「先生」と

呼んではいたが。

思案するよりもう一度逢つて親しく話せばいい

のだ。

明日の朝は病院へはバスで行こう。

*

朝、いつものように目覚めた美沙は、手早く用事
を済ませて、先日と同じ十時発の総合病院行き

コースの「百円バス」にためらいなく乗り込んだ。

乗ってくる人、降りていく人とさわやかな笑顔が

行き交う。次は老女が乗ってきたバス停だ。果た

して今日もくるだろうか。美沙は窓へ背伸びする

気分だ。

バスは止まった。美沙の期待通りあの人は乗つて

きた。

「おはようございます。造作かけます」

運転手に一礼して、そして、乗客の方にも

丁寧に頭を下げた。全く先日と同じように。

美沙は思い切つて、

「おはようございます」

と、老女に声をかけた。

「まあ。おはようございます」

美沙に頭を下げて、いいですかと目顔で問いか

けてきた。

「どうぞ、どうぞ」

美沙が手を差し伸べ、老女は美沙の隣の席に

腰を下ろした。それを確かめてから、バスはゆつ

くりと動き出した。

「病院ですか」

一息ついて老女が美沙に聞いてきた。

「ええ。もうすっかり良くなりましたが」

「それはよかったですね」

「どちらへ」

口を開いてから美沙はあわてた。あの喫茶店へ

行くのですかと質しているのだ。

美沙は恐縮したように頭をすくめて、老女の返事より先に、

「すみません」

と、小声になった。

「いえいえ。お察しの通り、あなたと逢ったあの喫茶店ですよ。〈愛慕里〉へね。私の日課みたいなもんですから」

「そうですか」

「ぜひ、またご一緒しましょう」

老女の誘いに美沙は即座に、

「ええ、ぜひ」

今度は力を込めて返事をした。美沙のことを

憎からず思ってくれていることが、素直に嬉しかった。

老女の顔が俄かに輝き、

「どうでしょう。よかったらお昼でもご一緒ににこやかに美沙の様子をうかがう。美沙は少し気恥ずかしいが、その誘いを待っていた。

「ええ、喜んで。病室での用事を済ませて、直ぐ行きます」

「いえいえ、あわてなくてもいいのよ。私には

一日の時間だけは充分ありますからね」

「いえ、今日は大した用事でないので、ぜひ」
美沙ははっきりと申し出た。

「そうですか。じゃ、今日にしましょうか」

やがて、バスは終点の病院前に着いた。乗っていた人たちにはそれぞれの目的があるだろう。笑顔を交わしながら降りて行った。老女と美沙も運転手の「ありがとうございます」の声を背中であげながら降りた。

待ち合わせの約束ができ、老女は喫茶店へ、そして美沙は、夫のいる病室へと急いだ。

夫は美沙が来るのを待ちかねたように、「今から五階でのリハビリに行こうと思っただところだ。昼までには終わるが、お前はどうか

る？」

「今日はすぐ帰るわ」

美沙は小さな嘘をついた。心の中にわだかま

りが残っていたからではない。隠さなければならぬことでもなく、正直に言っただけだ。だが、喫茶店までの出会いや、待ち合わせのことを説明するのが億劫だったただけだ。

「何か用事があるのか」

あいかわらず抑揚のない声で、それでも珍しく言葉をつなげる。

「別に何もないけど、家の片づけが残っているのよ」
嘘には嘘が重なるものだ。

「ふーん」

と夫はいつもの調子に戻り、何も問いたずことはしない。

おっとこかい
夫は五階でのリハビリへ、美沙は喫茶店へ
と急いだ。

美沙は息を弾ませ喫茶店のドアを開け、老女を
目で探した。

老女の姿がない。

ゆっくりと一通り見渡したがやはりいない。トイレ

でも行っているのかもしれない。とりあえず
自分の席を決めておこうと中へ入って行った。

すると、見覚えのある男性が、美沙を手招きす
る。老女と親しくしていた先日の男性だ。

「こちらへ」

そう言った。

美沙は少し戸惑いながら言われるまま、男性の

席の方へと歩み寄った。

「先生と約束していたみたいですね」

美沙は男性の前で突っ立ったまま、男性の話
を聞き、怪訝な面持ちで男性を見つめた。

(以上5月28日放送分)